

イニシへ断絶／ムカシ連続説でわかること（続）

—上代から中古の『土佐日記』『古今集』

『後撰集』『伊勢物語』『竹取物語』への継承—

田 口 尚 幸

I 序

本稿は、前稿「イニシへ断絶／ムカシ連続説でわかること—『日本書紀』『万葉集』『常陸国風土記』『伊勢物語』を例にして—」（以下、拙稿④と呼ぶ）の続編であり、上代におけるイニシへ／ムカシの使い分けが、中古の『伊勢』のみならず『古今集』『後撰集』『竹取物語』『土佐日記』にも認められること、すなわち、イニシへ断絶／ムカシ連続説がより広範囲に適用できることを説くものである。

ちなみに、拙稿④は、「上代におけるイニシへ／ムカシの使い分け—イニシへ断絶／ムカシ連続説の妥当性および『伊勢物語』への流れ—」（『国語国文学報』平27・3）、「上代におけるイニシへ／ムカシの使い分け（続）」『常陸国風土記』にイニ

シへ断絶／ムカシ連続説を適用することの妥当性—」（愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編）平28・3）、「上代におけるイニシへ／ムカシの使い分け（続々）」『日本書紀』にイニシへ断絶／ムカシ連続説を適用することの妥当性—」（『国語国文学報』平28・3）といった「上代におけるイニシへ／ムカシの使い分け」シリーズを（以下、拙稿①③と呼ぶ）、振り返って補足したものであった。拙稿①④で上代ならぬ中古の『伊勢』をとりあげたのは、イニシへ断絶／ムカシ連続説に帰結する「上代の例の名残と思われる中古の例」を指摘できれば〔注1〕、上代においてイニシへ／ムカシがどう使い分けられていたかを論じた私見の補足になる、と考えたからである。実際、拙稿①では、二二段の特例的イニシへ使用例二つを除いて、イニシへ断絶／ムカシ連続説が『伊勢』にもかなりの割合で適用可能な

ことを指摘し得たのであった。

もつとも、イニシヘ／ムカシの使い分けは、拙稿①で述べたとおり、上代↓中古で変化が見られる。たとえば西郷信綱「神話と昔話」（『神話と国家 古代論集』昭52・6平凡社）の注のところにある、「平安朝になると」イニシヘ／ムカシの「区別がしだいにばやけてゆ」く、という指摘は、拙稿①でも紹介しており、『伊勢』二二段の二例のみ適用可能とならないのも、そのように曖昧化していく過程の一端と見なし得る（本稿においても、最終のⅥ節で、『源氏物語』やそれ「よりもやや早」い成立と考えられている『落窪物語』の例を以て「注2」、右のような曖昧化が確定してくるさまを確認する）。

本稿では、拙稿①④で見た上代から『伊勢』への流れのように「注3」、『伊勢』以外にも目配りして上代↓中古におけるイニシヘ／ムカシ使い分けの継承を論じるが、上代↓中古ということなら、中古のなかでも、『伊勢』と同じく、曖昧化する前の比較的早い成立のものに焦点を絞るべきであろう。『伊勢』同様比較的早い成立のものは、副題にあげたとおり、日記では『土佐』、歌集では『古今』『後撰』、物語では『竹取』をさす。そして、拙稿①以来説いてきたイニシヘ断続／ムカシ連続説の妥当性とはより「注4」、拙稿④で説いた「イニシヘ断続／ムカシ連続説でこそ精確に理解できる例があること」も、「上代の例の名残と思われる中古の例」を以て、このシリーズ最後で念押ししたい。

具体的には、次節で、『土佐』『古今』『伊勢』をとりあげ、イニシヘ／ムカシの使い分けが明らかな例からイニシヘ断絶／ムカシ連続説の優位とイニシヘ断続／ムカシ断絶説の劣位を導き出す。そして、そこで見たイニシヘ／ムカシ使い分けの基準を、そこでの例に新たな例を適宜加えつつ、個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準として、次々節でとらえなおす。その基準は、イニシヘ／ムカシの断絶感・漠然性／連続感・明確性で説明可能な（断絶／連続感と漠然／明確性につながる点については拙稿①参照）、イニシヘ断続／ムカシ連続説に帰結する法則性も有し、可変的とは言え、可変性のなかに法則性も存することになる。つづいて、Ⅳ節では、『竹取』にある二つのムカシ使用例Ⅱ画「昔」に注目し、なぜムカシ使用なのかを考えることで読みの深化あるいはより精確な理解をめざす。ムカシ連続説に帰結する明確性のムカシで深くかつ精確にとらえなおす、と換言してもいい。また、『古今』『後撰』におけるイニシヘ／ムカシ使い分けを詳述するⅤ節では、イニシヘ断続／ムカシ連続説と正反対のイニシヘ断続／ムカシ断絶説に当たると言い得る先行研究、すなわち、吉野政治「イニシヘとムカシの違い―古今集を中心とする考察―」（『同志社女子大学日本語日本文学』平19・6）に対し、イニシヘ断続／ムカシ連続説の立場から批判するとともに、『古今』にイニシヘ断続／ムカシ連続説を適用することの妥当性を説く。

イニシヘは現在との連続性において捉えられた過去であり、

ムカシは現在と断絶している過去である。

とまとめる吉野説は、批判しておかねばなるまい。そして、『古今』の次の勅撰集『後撰』においても、引きつづきイニシヘ断続／ムカシ連続説適用が妥当なことを説く。

なお、本稿でとりあげる本文は、『新大系』によった『後撰』と『集成』によった『伊勢』のほかは『新編全集』によるが、歌番号・章段番号以外は『新編全集』の頁数で示し、小字で示される箇所や『風土記』の逸文は対象外とする。

注1 「上代の」は、拙稿①で用いた表現。

2 「よりもやや早」は、『日本国語大辞典 第二版』からの引用。

3 たとえば拙稿④では、「いにしへ」を含む六二段収録歌と「むかし」を含む六〇段収録歌を振り返り、

上代におけるイニシヘ／ムカシの使い分けと同様の使い分けが認められる。

と述べた。

4 拙稿④では、次のように振り返っている。

総論的位置づけの拙稿①では、そこで紹介した混乱を収束させるべく、——中略——イニシヘ連続／ムカシ断絶説およびイニシヘ同質／ムカシ異質説を批判し、イニシヘ断絶／ムカシ連続説の妥当性を説く、と述べた

イニシヘ連続／ムカシ断絶説やイニシヘ同質／ムカシ異質説に対する具体的な批判は、拙稿①を参照されたい。

Ⅱ 『土佐日記』『古今集』『伊勢物語』に見る明らかな使い分けおよびイニシヘ断続／ムカシ連続説の優位

前節で予告したとおり、本節では、『土佐』『古今』『伊勢』をとりあげて、ひとつづきの箇所にイニシヘ／ムカシが両方ある例から、イニシヘは心理的に遠く感じる過去、ムカシは近く感じる過去をさすことを指摘し、そうした遠／近感あるいは断絶／連続感が漠然／明確性につながることも指摘する。ひとつづきの箇所であれば、ひとつづきでない箇所より、イニシヘ／ムカシの使い分けが一層明らかになるう。そして、そうした明らかな使い分けの例からは、イニシヘ断絶／ムカシ連続説の優位、および、それと正反対のイニシヘ連続／ムカシ断絶説の劣位が、導き出されることになるはずである。

なお、イニシヘ断絶／ムカシ連続説派には、主な『万葉』注釈書では一三番歌に関する伊藤博『全注』、辞書では『角川古語大辞典』『古典基礎語辞典』があり〔注5〕、対して、イニシヘ連続／ムカシ断絶説派には、主な『万葉』注釈書では一三番歌に関する伊藤『釈注』や多田一臣『全解』（一三・三七八番など）でイニシヘ連続説、三一番歌でムカシ断絶説を採る〔注6〕、辞書では『日本国語大辞典 第二版』『古語大鑑』がある。この、正反対の二説が並存するという信じ難い混乱は〔注7〕、学界の不健全な土壌が招来したと考えられ〔注8〕、私が前者に決着させ収束に導こうとしても、一筋縄ではいくまいが〔注9〕、

それだけに、イニシヘ／ムカシの使い分けが明らかな例から前者の優位と後者の劣位を示すことが重要な意味をもとう（先行研究とがっぷり四つに組まない学界の現状を思うと「注10」ひとつづきの箇所イニシヘ断絶／ムカシ連続説こそが適用可能とわかったところで、やはり、無反応なままイニシヘ連続／ムカシ断絶説を採る者は出てくる気はするけれど、やるべきことはきっちりやっておきたい）。

では、ひとつづきの箇所にイニシヘ／ムカシが両方ある例の一つ目として、『新編全集』では五〇／五一頁に当たる『土佐』の例から見る。そこでは、まず、「故惟喬親王」「故在原業平中将」ゆかりの地を偲ぶ場面が、

その院、昔を思ひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。

と記される。『伊勢』八二段の渚の「院」が出てきて、「岡」には野生であろう「松」、「庭」には植えられたであろう「梅」があり、つづいて、二者が、各々、

千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変はらざりけり

君恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほにほひける

と詠む。それぞれ「いにしへ」「むかし」と詠まれる過去は、ともに「惟喬」「業平」の時代をさしながらも、使い分けられ

ている。この使い分けの基準は、次のように考えれば、理解し得る。すなわち、「千代経たる松」が受けもつ遙か遠いと見なす過去には「いにしへ」（「注11」、「君恋ひて世を経」た「梅」が受けもつそこそ近いと見なす過去には「むかし」、と使い分けていて、それは拙稿①で定説化していると紹介した経験外／経験内の過去に対するイニシヘ／ムカシ多用と符合し、遠／近感あるいは断絶／連続感でイニシヘ／ムカシを使い分ける基準が認められる。もちろん、「素直に思」うなら、

イニシヘが「直接に体験していないはるか以前」の過去に對し多用されたなら断絶的、ムカシが「直接体験し」ている「近い過去」に對し多用されたなら連続的

となるはずで（同稿参照）、このイニシヘ／ムカシの使い分けが明らかな例は、イニシヘ断絶／ムカシ連続説の優位とイニシヘ連続／ムカシ断絶説の劣位を示している。では、なぜ同じ過去なのに遠／近感あるいは断絶／連続感の差が出たのかと言うと、それは、時間の経過を表現する景物が、前者は「松」で、後者は「梅」であるからにはかなるまい。前者では、一般的に長寿のイメージを有し、実際「千代経たる」と冠される「松」を詠むゆえに、それに引つ張られるかたちで「むかし」よりもっと遠く断絶的な過去を意味する誇張表現の「いにしへ」を用いたのであろうし、後者では、「庭」から亡き「君」を「恋ひ」つづけ「て世を経」てきている「梅」を詠むゆえに、変わらず心中にある人物に對しても用いる、近く連続的な「むかし」で

表現したのであろう（変わらず心中にある人物に対するムカシ使用例に関しては、注18の『万葉』四四八三番歌参照）。また、循環して「なほにほひ」つづける不変なままの自然を詠む点でも、連続感のムカシの方が適すと考えられる（V節で述べる）。もともと、自然の不変・連続感を詠むということなら、「変はらざりけり」と詠む前者も該当するが、こちらは、「千代経たる松」に引つ張られて誇張することを重視し、断絶感のイニシへ使用になったものと思われる。

ひとつづきの箇所にはイニシへ／ムカシが両方ある例の二つ目は、『古今』真名序にある。『新編全集』四二五頁では、「大津皇子」（663-686）ではじまる段落の前の、「人代」に入ってから述べる段落に、漠然とした総称的「古の天子」といったイニシへ使用例が出てきて、四二八頁では、和歌再興を思い立つに至る段落が、

昔、平城天子、侍臣に詔して万葉集を撰ばしむ。それより以来、時、十代を歴、数、百年を過ぎたり。

とはじまる（「平城天子」は774⁸²⁴）。つまり、遠く断絶的で漠然とした前時代の過去には「古」を用い、一方、同じ中古の、どれほど前か具体的にわかる、近く連続的で明確な過去には「昔」を用いるわけである。さらに言うところ、「十代」「百年」という数は、片桐『全評釈』に従えば正しく、まさに具体的明確性を有するから、「昔、平城天子」は、漠然とした総称的「古の天子」と好対照をなす。『土佐』の例で見た遠／近感あるい

は断絶／連続感に加えて漠然／明確性も言える点を、おさえておこう。そして、こちらのイニシへ／ムカシの使い分けが明らかでない例も、やはり、イニシへ断絶／ムカシ連続説の優位とイニシへ連続／ムカシ断絶説の劣位を示している。

同様なことは、ひとつづきの箇所にイニシへ／ムカシが両方ある例の三つ目にも当てはまる。『古今』仮名序は、和歌が盛んであった時代を、遠く断絶的で漠然とした過去＝隔世の感ある時代と見なし、「古」を用いている（全七例中六例）。『新編全集』二二頁「古の世々の帝」は、前述の真名序「古の天子」と同一視でき、二四頁「古よりかく伝はる」、二五・二九頁「古の世々の帝」あるいは「古の天子」の「古」と同一視し得る。仮名序は、断絶感・漠然性のイニシへを使用して、隔世の感ある和歌隆盛時代をよく振り返っている。ちなみに、全七例のうち右にない一例は、二七頁「古の衣通姫」であり、真名序にも四二七頁に同語および「古の猿丸大夫」があつて（真名序はこれでイニシへ／ムカシ使用の全四例網羅）、断絶的あるいは漠然とした伝説的人物にはイニシへ使用が普通であることがわかる（拙稿①でも、『万葉』歌における伝説の時代の故人に対するイニシへ使用は指摘している）。また、仮名序内に出て真名序との比較になつてしまふが、仮名序のこれらの例は、前述した近く連続的で明確な真名序「昔、平城天子」と、やはり、好対照になる。そして、仮名序で唯一「昔」を用いる二三頁「男

山の昔を思ひ出でて」は、経験内の過去に対するムカシ多用と符合する。典拠は、

今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを
という『古今』八八九番歌であり、それは「この自分にも確かに、男盛りの栄えゆく時代はあった」との気持ちを読むものであるから、単に近く連続的な経験内というだけでなく、「確かに」といった明確性も読みとれる。まさしく、連続感・明確性のムカシに該当しよう。こちらの「男山の昔」とは、仮名序内で好対照をなす。要するに、仮名序では、「古」六十一例があらわす過去と「昔」一例があらわす過去を比べると、『土佐』や真名序の例と同様の遠／近感あるいは断絶／連続感が感じられ、真名序の例と同様の漠然／明確性も認められるのである。このイニシヘ／ムカシの使い分けが明らかな例からも、イニシヘ断絶／ムカシ連続説の優位とイニシヘ連続／ムカシ断絶説の劣位は言える。

実は、ひとつづきの箇所にはイニシヘ／ムカシが両方ある例としては、既に拙稿①で、『歌ことば歌枕大辞典』の「昔」の項にある指摘を引用して、首肯している〔注12〕。同書同項は、いにしへのしづのをだまき繰りかへしむかしを今になすよしもがな

という『伊勢』三二段収録歌をあげ、

序詞中の古代の織物の糸を繰る糸巻である「しづのをだまき」が「いにしへ」であるのに対して、自らのかつての恋

の経験が「むかし」と詠まれているのは、両者の違いをよく表している

と述べる〔注13〕。遠く断絶的な隔世の感ある時代にはイニシヘ、近く連続的な経験内の過去にはムカシ使用が普通、ということをやよく表している」例であり、これまで見てきた一／三つ目の補足となる。

つづいては、厳密にはひとつづきの箇所にイニシヘ／ムカシが両方ある例とは言えないものの、準ひとつづきの箇所とも言ふべき両段の各収録歌に「むかし」「いにしへ」がある例、すなわち、拙稿①でとりあげ拙稿④でも振り返った『伊勢』六〇・六二段を見る。両段とも、都からの使者である主人公が、今は都落ちしているもと妻に歌を詠み、主人公との経験内の過去を思い出させる、といったかたちになっているが、経験内の過去であるところは同じでも、経験内の過去に対するムカシ使用で一致していないのは、もと妻の愚かさ・零落度と主人公の制裁の度合に差があることが〔注14〕、関係しているよう。注目すべきは、六二段のもと妻が過去を思い出せないほど変わり果てているのに対し、六〇段のもと妻がまだ思い出せる程度にとどまっている、という点で、拙稿④では次のように述べた。

とりわけ興味深いのは、六二段にある、

いにしへのにはひはいづらさくら花こけるからともな
りにけるかな

という歌と、六〇段にある、

五月待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする
という歌で、前者には「いにしへ」使用の理由、後者には
「むかし」使用の理由が認められる。

—中略—

『伊勢』のなかで対になっていると考えられる六二段と
六〇段の各歌は、過去を思い出せないと言む場合には断絶
感・漠然性のイニシへ、過去を思い出せると言む場合には
連続感・明確性のムカシを用いており、イニシへ断絶／ム
カシ連続説でこそ精確に理解できる

右の準ひとつづきの箇所イニシへ／ムカシが両方ある例、す
なわち、イニシへ／ムカシの使い分けがほぼ明らかな例からも、
イニシへ断絶／ムカシ連続説の優位とイニシへ断絶／ムカシ断
絶説の劣位、というこれまでと同じ結論に至るのである〔注15〕。

以上、ひとつづきの箇所にイニシへ／ムカシが両方ある例（お
よび、準ひとつづきの箇所にイニシへ／ムカシが両方ある例）
を見て、そうした明らかな使い分けの例から、イニシへ断絶／
ムカシ連続説の優位とイニシへ断絶／ムカシ断絶説の劣位を導
き出してきた。イニシへ断絶／ムカシ断絶説派に対し、言いた
い。これらをイニシへ断絶／ムカシ断絶説で説明できるか、と。
がつぱり四つに組んだ上で反論を試みてほしい。もちろん、
私見は本節（および本稿）以外にもあり、それらに無反応であつ
ても困るが、とりあえず本節の私見くらいには反応してもらい
たいと思う。

注5

『基礎語』の「むかし」の項および「いにしへ」の項は白井清子の
担当で、白井には「イニシへとムカシをめぐる」（『学習院大学上代
文学研究』平10・3）もある。

6

多田に対しては、イニシへ断絶／ムカシ断絶説支持に関連して、領
けない点がある。梶川信行編・上代文学会監修『おかしなぞ！国語教
科書 古すぎる万葉集の読み方』平28・11笠間書院に収録される「国
語教育の危機」では、正反対の二説の「対立」を以て、高校「教科書
編者」に対して「どのように指導したらよい」か「きちんとした説明
を聞きたい」と述べているのであるが、その態度は理解できない。学
界の不健全な土壤ゆえに「対立」＝混乱が収束に向かわないというの
に（後述）、自己批判せず高校「教科書編者」に「きちんとした説明を」
求めるのは、おかし。また、自分の立場が明確であるにもかかわらず、
高校「教科書編者」に「対立」を言うのも、矛盾している。この
ことは国語教育に関する拙稿「中高定番古典教材に関する動画講義も
活用した具体的現状打開策―赤人富士讃歌で文法以外にも教えられる
本質的かつ知的刺激に富む論の提供―」（『国語国文学報』平31・3）
に書いてあるので、参照されたい。

7

拙稿①は、そのように正反対の二説が並存することを紹介するとこ
ろからはじまる。参照されたい。

8

「不健全な土壤」は、拙稿③④で用いた表現。

9

「二筋縄ではいくまい」は、拙稿④で用いた表現。

10

「先行研究とがつぱり四つに組」は、拙稿③④で用いた表現。

11

この歌同様、普通ならムカシを使用すべきところなのに遠い過去と
見たい気持ちからイニシへを使用する類例があるので、紹介しておく。

古へになほたちかへる心かな恋しきことにも忘れせで
という『古今』七三四番歌である。次節で詳述するように、「忘れ
ないで変わらず心中にある人物の過去にはムカシ使用が普通なのであ
るが、それでもやはり」の意の「なほ」に注目すれば、通常は「た
ちかへ」り難い「忘れ」そんな遠い過去であっても「なほたちかへる」
ということであるから、その過去は一般的には断絶感あるものと思わ
れる。「なほ」が活きる訳を考えると、必然的にそうなるはずで、イ
ニシへ断絶説に帰結しよう。

12 同書同項を見ると、本来「自らの回想や記憶の中での過去を意味して」なかったイニシへ／「意味していた」ムカシと読みとり得るから、経験外／経験内の過去に対するイニシへ／ムカシ多用を言っていることになる。

13 この歌と第二句まで同じ、
いにしへの倭文の苧環いやしきもよきもさかりはありしものなり

という「古今」八八八番歌も、『伊勢』三二段収録歌同様、「いにしへ」は隔世の感ある時代をさしている。ちなみに、『新編全集』は、「倭文」は模様のある日本古来の織物の一種。
と注し、「いにしへの倭文の苧環」の訳は、

古代の「しずのおだまき」ではないが
となっている。「古来」「古代」としている点から考えても、この「いにしへ」は隔世の感ある時代と思われる（当然、イニシへ断絶説に帰結）。

14 拙稿「伊勢物語相補論序説Ⅰ―章段単位での考察―」（『伊勢物語相補論』平15・9 おうふう）参照。

15 六二段収録歌の類例を『万葉』歌からさがせば、たとえば拙稿①でとりあげた、

眉根搔き下いふかしみ思へるに古人を相見つるかも

古 ささきし我や はしきやし 今日やも児らに いさにとや
思はえてある

という二六一四・三七九一番歌が該当する。経験内の過去を詠んでおり、一見ムカシ使用でよさそうに見えるものの、遠く断絶的で漠然とした過去と見たい気持ちの前面に出すため、イニシへ使用になったものと思われる。前者は、関係の絶えていた夫の突然の来訪ゆえ、経験内の過去に対してであっても「古」を用いるのであるうし、翁が華やかなりし青年時代と老いさらばえた現況の落差を詠む後者は、『古今』仮名序や『伊勢』三二段収録歌で見たのと同様な隔世の感を表現しているから、やはり、経験内の過去に対して「古」を用いるのであろう。

Ⅲ 個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準とその可変性のなかに存する法則性

本節では、前節で見たイニシへ／ムカシ使い分けの基準を、前節の例に新しい例を適宜加えながら、個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準としてとらえなおす（可変的ゆえ、たとえば「約何年以上は／以下は／」というような絶対的なものではない）。前々節で予告したとおりであるが、これまた予告してあるように、その基準は、可変的でありながら、可変性のなかに法則性も存する、言わば、法則性ある可変的基準と言える。イニシへ／ムカシの断絶感・漠然性／連続感・明確性で説明できる、イニシへ断絶／ムカシ連続説に帰結する法則性であり、それも併せて説いていく。

正反対の二説すなわちイニシへ断絶／ムカシ連続説とイニシへ連続／ムカシ断絶説が並存したまま未決着、という信じ難い混乱が収束に向かわないのは、前節で述べたとおり、先行研究とがつつり四つに組まない学界の不健全な土壌のせいと考えられるが、混乱を生じさせているおおもとの原因をさぐれば、イニシへ／ムカシを使い分ける基準が、絶対的なものでなく、ケースバイケースな可変的なものであるから、という点にたどり着こう。個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準を明らかにし、さらに、その可変性のなかに存する法則性も明らかにすることで、もつれた糸を解きほぐすごとく、混乱を

収束へと導きたく思う。個々の気持ちや表現したいことを各文脈から読みとり、可変的基準のなかに断絶感・漠然性のイニシへ／連続感・明確性のムカシで説明できる法則性も見出していく本節は、かなり重要な役割を担っている【注16】。

では、『土佐』において二者が各々詠んだ「千代経たる松」の「いにしへ」歌と「君恋ひて世を経る宿の梅」の「むかし」歌から振り返る。各歌とも「惟喬」「業平」の時代をさしているにもかかわらず、誇張する／しないという個々の気持ちに依拠して、言い換えると、個々が表現したい遠／近感あるいは断絶感／連続感に依拠して、前者はイニシへ、後者はムカシ使用になっていた。客観的には同じ過去をさしているけれど、二者の主観的相違により、イニシへ／ムカシ使用いづれかに定まらないで、可変的になったのである。また、主観的と言っても、気まぐれや好みの問題ではなく、そこには断絶感のイニシへ／連続感のムカシという法則性もあった。可変的基準もその可変性のなかに存する法則性も見出し得るのであって、個々の気持ちや表現したいことを各文脈から読みとる必要性を、思わずにはいられない。

断絶感・漠然性のイニシへを使用して、隔世の感ある和歌隆盛時代をよく振り返っていた『古今』仮名序の「古の世々の帝」等も、思い出そう。実は、和歌隆盛時代なら必ず隔世の感ある時代と見なしてイニシへ使用になるとは限らず、『古今』内でも、あはれ昔へ ありきてふ 人麿こそは うれしけれ―中略

―末の世までの あととなし 今もおほせの くだれるは 塵に継げとや 塵の身に 積もれる言を 問はるらむ

と詠む一〇〇三番歌は、同じ和歌隆盛時代の「人麿」の時代に、「古」ならぬ「昔へ」を用いる。「末の世までの あととなし」「塵に継げとや」からわかるとおり、和歌隆盛時代の「人麿」ではあっても、断絶感ある先達ではなく、連続感ある先達としてとらえようとする気持ちから、連続感のムカシ使用になっているのである。また、たとえば『新大系』が「あはれ昔へ―うれしけれ」を「ああ、昔に確かに居たという柿本人麿こそは、ありがたい人です」と訳しているように（傍点田口）、漠然とした先達ではなく、明確な先達としてとらえようとする気持ちもあるから、明確性のムカシ使用とも言い得る。拙稿①では、『万葉』一六七八・一七五四・一七五九・三六九五・四一四七番歌を例にして、

明確に信じ、イメージし、頷くのは、絶対的に遠く断絶的な事象であつても心理的に近く連続的と感じていることを意味し、そこで「昔」が用いられるなら、ムカシ連続説に帰結する

と述べ、さらに、

ムカシの明確性を敷衍して説明したい例が、多々あるとも述べたが、それは「人麿こそは うれしけれ」と詠む『古今』一〇〇三番歌も該当する。つまり、ここでは、「末の世」Ⅱ「今」へと連続する、心理的にも近い明確な先達「人麿」、

ということを表現したいため、断絶感・漠然性のイニシへ使用にならないで、連続感・明確性のムカシ使用になったものと思われる。『古今』内で客観的には同じ和歌隆盛時代の過去をさすにもかかわらず、イニシへ／ムカシ使用いづれかに定まらない仮名序「古の世々の帝」等と一〇〇三番歌。両者からは、主観的相違による可変性を見ていい。ただし、個々の気持ちや表現したいことを各文脈から読みとりさえすれば、そうした可変的基準のなかに断絶感・漠然性のイニシへ／連続感・明確性のムカシといった法則性を見出せる、ということもまた言い得るのである。

『古今』仮名序唯一のムカシ使用例「男山の昔」、ひいては、その典拠たる『古今』八八九番歌「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを」に移ろう。そこで前面に出されたのは、「この自分にも確かに男盛りの栄えゆく時代はあった」という気持ちであり、近く連続的で明確な過去と見たい気持ちであった。そして、それが表現したいことであれば、当然、連続感・明確性のムカシ使用になろうし、経験内の過去に対するムカシ多用とも符合する。一方、そうした「男山の昔」「昔は男山」に対し、同じ経験内の過去でも、『伊勢』六二段収録歌「いにしへのほひはいづらさくら花こけるからともなりにけるかな」や「眉根搔き下いふかしみ思へるに古人を相見つるかも」「古ささきし我やはしきやし 今日やも児らに いさにとや思はえてある」といった『万葉』二六一四・三七九一番歌は、逆に、

経験内の過去でないように詠んでおり、注15では、『万葉』の両歌に関し、遠く断絶的で漠然とした過去と見たい気持ちを前面に出しているとした（過去を思い出せないと詠む六二段収録歌も、同様な気持ちを前面に出しているよう）。「男山の昔」「昔は男山」とは逆に、表現したいことは断絶感・漠然性と考えられる。こちらも、客観的には似たような過去でありながら、どんな気持ちを前面に出しているか、あるいは、表現したいことは何か、といった主観的相違が、ムカシ／イニシへ使用いづれかに定まらない可変性を招来しているのであるが、そうした個々の気持ちや表現したいことを各文脈から読みとれば、その可変的基準のなかに、連続感・明確性のムカシ／断絶感・漠然性のイニシへという法則性も見出し得るわけである。

ちなみに、拙稿①では、『風土記』における「ケースバイケースで考えなければならない」イニシへ／ムカシ使い分けの例を指摘し、その流れで『常陸』に関する拙稿②を書いた。詳細はそれらに譲り、拙稿②の私見を端的にまとめた次の箇所のみ引用する。

明確な「昔」は、明確に記録されるべき中央性に対して使用し、漠然とした「古」「上古」「古昔」は、明確に記録されるべきでない非中央性に対して使用する。そうしたイニシへ／ムカシの使い分けによって、中央性を際立たせる『常陸』の独自性は成り立っている。

『豊後』『肥前』『播磨』といったムカシ偏重の『風土記』に比べ、

『常陸』におけるムカシ／イニシへの使い分けは目立っているが、ムカシ／イニシへを使用される過去がそれぞれどの程度廻るかを見ても、どの程度廻るならいずれを使用するという、客観的な時間で定められる基準は認め難い。時間的には同程度廻っていると思し得るのに、やはり、いずれかに定まらない可変性があり、この点は、本節で見てきた例と同じである。のみならず、中央性を際立たせるために明確に記録すべき／明確にすべきでない、という気持ちに応じた明確性のムカシ／漠然性のイニシへといった法則性もその可変的基準のなかに見出せるから、これも同じと言える。『常陸』で表現したいのは、ムカシ／イニシへを使い分けて中央性を際立たせる、ということであって、そうした気持ちや表現したいことを各文脈から読みとらねばならない。これまた、本節で述べてきたとおりなのである。

個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準を明らかにできれば、混乱を生じさせているおおもとの原因がわかるし、その可変性のなかに法則性が存することも明らかにできれば、もつれた糸を解きほぐすごとく、混乱を収束へと導き得る道が見えてくる。そして、その法則性が断絶感・漠然性のイニシへ／連続感・明確性のムカシで説明できる以上、帰結するのは、イニシへ連続／ムカシ断絶説の方ではなく、イニシへ断絶／ムカシ連続説の方でなければならぬまい。

注16

前節では、イニシへ連続／ムカシ断絶説派に対して、とりあえず前節の私見くらいには反応してもらいたい旨述べたが、本節も重要なところなので、できれば前節の私見について本節の私見にも反応してほしい。

IV なぜムカシ使用なのかを考えることで可能となる読みの深化あるいはより精確な理解

I節において「IV節では、『竹取』にある二つのムカシ使用例Ⅱ両『昔』に注目し、なぜムカシ使用なのかを考えることで読みの深化あるいはより精確な理解をめざす」とも「ムカシ連続説に帰結する明確性のムカシで深くかつ精確にとらえなおす」とも予告したとおり、本節では、『竹取』にある二つのムカシ使用例Ⅱ両「昔」をとりあげ、右の予告が可能なことを示す。

なお、『竹取』は物語であり、たとえば『土佐』のような記録の性格の強い日記と比べれば「注17」、中古のなかでも比較的早い成立という点は変わらなくても、ジャンルの異なりによるちがいは考え得る。『土佐』の場合、前々節・前節でとりあげた「いにしへ」歌・「むかし」歌以外を見ると、全例ムカシ使用になっている。まず、『新編全集』三一・三三・四〇・五〇頁の地の文にある「昔」四例は、記録の性格の強い日記らしい、記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシ使用ととれる。次に、同じく地の文にある二八・四四・四六・五一頁の「昔へ人」「昔の人」

「昔の子」四例にしても、一見、出発直前に亡くした子が変わらず心中にあることがわかる、心理的に近く連続的な故人に対するムカシ使用ととれそうではあるものの〔注18〕、これらも、物語ならぬ日記の、しかも、地の文にある。記録として全体を統一しようとする筆者のムカシ使用、ととろう〔注19〕。要するに、地の文におけるムカシ使用の四十四例に関しては、記録として日記を書く筆者による全体的統一意識で説明できてしまい、「いにしへ」歌・「むかし」歌とちがって、気持ちや表現したいことを考えて深くかつ精確にとらえなおすまでもないのである。残るは四一・五〇頁の話し言葉にある「昔」二例であるが、前者は、経験内の過去に対するムカシ多用と符合し（話者「女」が経験した過去に対するムカシ使用）、

これ、昔、名高く聞こえたるころなり

とある後者は、話者「人々」による記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシ使用ととれる。これらであれば、日記筆者の全体的統一意識によるものではないけれど、やはり、気持ちや表現したいことを考えて深くかつ精確にとらえなおさねばならないほどの例ではなく、なぜムカシ使用なのかがすぐわかる例と言える。

とすると、本節において注目すべきは、『竹取』にある次の二つのムカシ使用例ということになろう。「火鼠の皮衣」の代金を追加請求する「王けい」からの手紙にある、

火鼠の皮衣、からうじて人をいだして求めて奉る。今の世

にも昔の世にも、この皮は、たやすくなき物なりけり。昔、かしこき天竺の聖、この国に持て渡りてはべりける、西の山寺にありと聞きおよびて、朝廷に申して、からうじて買ひ取りて奉る。

という両「昔」である（『新編全集』三八―三九頁にあり、同書は「国」を「唐土の国」と訳す）。「昔の世」は「今の世」に対する遙か遠い過去であるし、「昔」につづく「かしこき天竺の聖」も前々節で見た「古の衣通姫」「古の猿丸大夫」同様の伝説的人物であるから、普通なら、断絶的あるいは漠然とした過去・伝説ということで、いずれもイニシへ使用になってよさそうなどころではある〔注20〕。にもかかわらず、ともにムカシ使用になっていて、イニシへ／ムカシ使用いずれかに定まらない可変性があり、しかも、その可変性なかには、両「昔」を用いる理由＝法則性も次のように見出し得る。こここそ、差出人「王けい」の気持ちや表現したいことを考えて深くかつ精確にとらえなおしたいところと言える。一体、「王けい」の気持ちや表現したいことは何か。「王けい」は、偽物の「火鼠の皮衣」を明確に本物と信じ込ませようとする気持ちでおり、表現したいことは「火鼠の皮衣」の明確な本物らしさと見ていい。ゆえに、明確性のムカシ使用になっているのであろう。もちろん、明確性のムカシ使用はムカシ連続説に帰結するから、ムカシ連続説で深くかつ精確にとらえなおせたことになるし、明確に本物と信じ込ませようとあえて、両「昔」を用いた「王けい」

の気持ちを讀みとれば、言い換えると、表現したいことが「火鼠の皮衣」の明確な本物らしきであると思ひとれば、なぜムカシ使用なのかを考へることで讀みの深化あるいはより精確な理解ができたことにもなる。

而「昔」以外の「竹取」の例に関しても、触れておかねばなるまい。日記筆者による全体的統一意識が認められた『土佐』同様、『竹取』でも物語作者による全体的統一意識が認められるであろうか。差出人「王けい」の気持ちや表現したいことを考へて深くかつ精確にとらえなおすべき手紙中の而「昔」は除くとしても、ほかはどうであろうか。実は、『竹取』はイニシへ使用例がなくムカシ使用例ばかりで、その点は地の文の全例がムカシ使用の『土佐』と似ていて、氣になるところではある。『竹取』のムカシ使用例は、而「昔」に一七・六〇・六五頁の三つが加わり、それら三例のうち地の文における記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシ使用となると、一七頁すなわち冒頭の常套的表現「いまはむかし」一例しかない。これだけでは、物語作者による全体的統一意識があるとはいひ難い（そもそも、前述したとおり、『竹取』は、記録的性格の強い日記ではなく、物語である）。残る六〇・六五頁の、

みやつこまろが手にうませたる子にてもあらず。昔、山にて見つけたる。

昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。

という話し言葉中の各「昔」に関しても言えば、前者は、経験内の過去に対するムカシ多用と符合するし（話者「翁」が経験した過去に対するムカシ使用）、後者は、拙稿①の注のところで、前世とは、近くはないけれど連続的な過去であるから、これはムカシ連続説に帰結する。

と述べた「前世」に当たる、話者「かぐや姫」にとつて連続感ある過去になるゆえのムカシ使用と考へられる。もちろん、前述した『土佐』の話し言葉中の「昔」二例同様、これらも、物語作者の全体的統一意識によるものではないが、やはり、気持ちや表現したいことを考へて深くかつ精確にとらえなおさねばならないほどの例ではない、なぜムカシ使用なのか即わかる例と言ひ得る。よつて、而「昔」のみに注目した次第である。

イニシへ／ムカシの使い分けに関し、上代から中古への継承はあつた。そう念頭に置いておけば、『竹取』等中古のなかでも比較的早い成立のものを讀む際に（本稿で繰り返しとりあげている『土佐』『伊勢』の例も当然含む）、役立つことがあろう。『竹取』の而「昔」に関し、なぜムカシ使用なのかを考へることで讀みの深化あるいはより精確な理解が可能となつたように。

ちなみに、『伊勢』六二段収録の「いにしへ」歌と六〇段収録歌の「むかし」歌をとりあげた拙稿④で、

イニシへ断続／ムカシ連続説でこそ精確に理解できる例と言へる。今後、而歌を論じる際は、イニシへ断続／ムカシ

連続説に触れないわけにはいくまい。

と述べたのと同じく、『竹取』で両「昔」を論じるなら、本節の私見に触れてもらいたい（たとえば『新編全集』は両「昔」を「昔」と訳しているに過ぎず、精読とは言えない）。

注17 「記録の性格の強い」は、拙稿①で次のように用いた表現であり、そうした「類のもの」には「実に顕著なムカシ偏重が認められる」。

『万葉』の歌ならぬ題詞・左注・風土記」中の「豊後」「肥前」「播磨」「靈異記」といった記録の性格の強い類のものに注目すると、実に顕著なムカシ偏重が認められる。

18 心理的に近く連続的な故人に対するムカシ使用例として、拙稿①④で、

移り行く時見ることには心痛く昔の人し思ほゆるかも
という、比較的近時に他界し、折に触れ何度も強く「思」い出される故「人」に対する『万葉』四四八三番歌を論じているので、参照されたい。ちなみに、次節でとりあげる望月論文は、注のところで『土佐』の「昔へ人」「昔の人」をあげ、前者を「忘れようにも忘れることのできない亡き人」、後者を「恋しい亡き人、心引かれる故人」としている。

19 拙稿①で指摘したとおり、『万葉』歌では故人生前の時代あるいは故人自身にはイニシへ使用が普通であるが、『万葉』歌中にも注18にあげた四四八三番歌のような例はあつて、心理的に近く連続的な故人にはムカシ使用になる。『土佐』の「昔へ人」「昔の人」「昔の子」四例も、一見そう見えそうではあるけれど、これらに關しては、記録として日記を書く筆者による全体的統一意識で説明する。

20 たとえば、拙稿①で見た古今東西の古今に当たる文脈中のイニシへ使用例や、拙稿③④で見た『万葉』三三九・三四〇番歌の「古の大き聖」「古の七の賢しき人たち」にある各「古」など、断絶的あるいは漠然とした過去・伝説を言う文脈でイニシへ／ムカシ使用いずれになるかと言え、イニシへ使用になるのが普通である。

V 『古今集』『後撰集』にイニシへ断絶／ムカシ連続説を適用することの妥当性

『古今』『後撰』におけるイニシへ／ムカシの使い分けを詳述するのが本節であるが、『古今』に関しては、1節で予告したとおり、先行研究としてイニシへ連続／ムカシ断絶説と言い得る吉野説があるため、それをイニシへ断絶／ムカシ連続説の立場から批判しつつ、『古今』にイニシへ断絶／ムカシ連続説を適用することの妥当性を説き、その上で、『後撰』も『古今』同様であることを説く。また、『古今』の場合、吉野説以外に、いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむという八八七番歌に関する内田順子「いにしへの野中―古今集歌と『類聚国史』所載の古歌―」（『中古文学』平17・5）もあり、「いにしへの野中」をどこかに特定できるかといった本論に前置される国語学部分が先行研究に当たるので、その国語学部分に従えないことも併せて説く（「いにしへの野中」の特定については判断保留とする）。

はじめに、吉野の「調査対象」の決め方に絞り、批判する（イニシへ／ムカシ使用例のとらえ方に対する批判は後述）。吉野は、

両語の違いは最も古い上代の用例から検討すべきであるが、上代の用例で、万葉仮名で書かれた例は少なく、――中略――始どは「昔」「古」「往古」「古昔」「従来」などの正訓

字で書かれており、ムカシともイニシへとも訓み得るものが多い（観智院本類聚名義抄にも「昔」「古」ともにムカシ・イニシへの訓を載せる。仏中八九・仏中六三）。

と述べた上で、

本稿では平安時代の初期の資料である古今集（九〇五年成立）の用例について検討する

と「調査対象」を限定する。読み下しの問題については、拙稿④で、

歌の場合は、音数に合うよう「いにしへ／むかし」どちらかの読みを選べばいい

とか、

イニシへ断絶説で説明し得る類例を見つければ、「いにしへ／むかし」どちらの読みを採るべきかは即決し、イニシへ断絶説の優位とイニシへ連続説の劣位も言える。

とか、

類例をさがさなくても、断絶感・漠然性のイニシへに該当するか連続感・明確性のムカシに該当するかがわかれば結論を出せるのであって、今後、原文＝漢字をどう読むかを考える際は、イニシへ断絶／ムカシ連続説に当てはめて結論づければいい

とか述べたし、そもそも、「正訓字」も含めた範囲で、経験外／経験内の過去に対するイニシへ／ムカシ多用が定説化しているのである。拙稿①はまだなかったとしても、そこで援用もし

た望月郁子「イニシへ・ムカシ考」（『常葉女子短期大学紀要』昭44・11）はあつたわけで、そうした先行研究とがっぷり四つに組まなかった点は領けない。吉野は、望月論文を「特筆すべきもの」としてあげ、

用例に即して最も詳しい考察がなされている

と紹介しているだけに、吉野の「調査対象」限定は理解できない。「正訓字」も含めた範囲で明らかな傾向が認められるかをさぐり、認められそうなら、その範囲で論を進めるべきであろう。ちなみに、吉野は、「観智院本類聚名義抄にも『昔』『古』ともにムカシ・イニシへの訓を載せる」と述べていた。ところが、『新編全集』の『万葉』『記』『紀』『風土記（播磨・出雲・常陸）』『靈異記』で「いにしへ／むかし」どちらかに読む「昔」「古」を調べると、前者は「むかし」、後者は「いにしへ」と例外なく、読まれていて、それを「調査対象」にしないのはどうかと思う。そして、後述するように、『古今』（および『後撰』）におけるイニシへ／ムカシ使い分けも、拙稿①④や本稿でこれまでとりあげてきた『伊勢』の例と同じく、上代から中古への継承を示しており、イニシへ断絶／ムカシ連続説を適用することが妥当と考えられるのである。

もう一つの内田説は、紹介すると同時にイニシへ／ムカシ使用例のとらえ方に対する批判まで一気に行なう（本稿では、前述の国語学部分を内田説としてとりあげる）。

はじめに、基本中の基本を批判しておく。論文であれば、イ

ニシへ／ムカシの使い分けに関する注釈書なり辞書なり論文なりの名を明記したり記述を引いたりすべきなのに、それがないのは理解できない。学会誌収録論文であることを思うと、学界全体のあり方まで危惧される。

内容を見ていっても、否定的結論に至る。以下、具体的かつ網羅的に批判する。内田が、

「いにしへ」は個々の人の記憶とは別に、客観化された過去
去

と述べるうちの「個々の人の記憶とは別」については、私見で言うところの経験外に当たるからいいとしても、「客観化された過去」については、いかがなものか。

まず、内田は、イニシへ使用例の前にムカシ使用例をあげ、

「むかし」は個々の人の記憶として回顧されるような——中略——漠然とした過去

と述べる。「個々の人の記憶として回顧される」についても、私見で言うところの経験内に当たるのでよしとするが、例示は四つしかなく、僅少で疑問をおぼえるし、何より、「漠然」性の指摘が問題となろう。一つ目にあげられるムカシ使用例から見えていく。一例目は、拙稿①で引用し、ムカシの連続感・明確性がわかる指摘として援用した望月説でも引かれる、

昔見し象の小川を今見ればいよさやくくなりけるかも
という『万葉』三一六番歌。後述する「知ラヌ」イニシへ使用例との比較で見れば、明確性を示すことは明らかで、漠然性を

示す例とは言えない。二例目は、連続感・明確性のムカシ使用例として引用した『伊勢』六〇段収録歌と同じ（Ⅱ節参照）、『古今』一三九番歌。やはり、漠然性の例たり得ない。三例目は、連続感・明確性のムカシ使用に当たるとして引用した『古今』八八九番歌（Ⅱ節・前々節参照）。漠然性の例と認められない点は、一・二例目と同様である。四例目は、経験内の過去に対するムカシ使用と考えられる、

長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば
という『古今』六三六番歌。『新編全集』の訳は、

普通いわれるように、単純に長いものと思ひこむわけには
いかないよ。昔から逢う人次第でどうとも思われる秋の夜
なのだから。

となっており、一般論に反対できるほどの明確な経験にもとづいていることがわかる。読みとるべきは、漠然性ならぬ明確性である。右のとおり、内田のムカシ使用例のとらえ方には従えない。みな漠然性の例とは言えず、その逆の、ムカシ連続説に帰結する明確性を示しているのである。

次に、内田は、「むかし」が「漠然とした過去を言うものであるのに対して」と述べた上で（傍点田口）、前述のとおり「いにしへ」を「客観化された過去」と述べ、「歴史的過去」とも述べる。「漠然とした過去」＝「むかし」に「対して」の「客観化された過去」「歴史的過去」＝「いにしへ」と言っているわけで、内田の言う「客観」性・「歴史」性は、私見で言うところの

ころの明確性と同一視し得るのではあるが、ムカシが漠然性、イニシヘが明確性を受けもつとする内田説に対し、イニシヘが漠然性、ムカシが明確性を受けもつとするのが私見であるから、逆になっていて、頷くことはできない。また、イニシヘ使用例でも例示は七つと僅少で、疑問に思うし、内容を見ていっても、ムカシ使用例の場合と同じ否定的結論に至る。一例目は、拙稿①で故人生前の時代に関する例としてあげ、心理的に遠く断絶的と感じる例とした、『万葉』一四四番歌（同稿において『万葉』歌では故人生前の時代あるいは故人自身にはイニシヘ使用が普通であることも、注19で述べた）。断絶感は漠然性と結び付くはずで、一例目を明確性の例とは見なせない。二例目は、拙稿③④で〈隔世のイニシヘ〉の例として引用した『万葉』三四〇番歌。隔世の感＝断絶感が漠然性と結び付くなら、一例目同様、明確性の例とは認められない。三例目は、拙稿①④で〈漠然〉から始発する表現方法を指摘した『万葉』三七八番歌。この歌からは、明確性ならぬ漠然性を読みとりたい。四例目は、拙稿①のイニシヘ＝ケムの親和性のところで引用した『万葉』四九七番歌。このケムとの親和性はイニシヘの断絶感・漠然性を示すと考えられ、明確性の例とは言えない。五例目は、いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ

という『古今』三五三番歌。ここで思い出されるのは、内田が一つ目のムカシ使用例として引いていた「昔見し」の『万葉』

三一六番歌、および、それも含む『万葉』歌を例に「知ラヌ」イニシヘ／「ムカシ見シ」を比較する望月説である（望月は、『古今』三五三番歌も、「遠いがゆえにわからない過去」の例として引く）。拙稿①では、その望月説をイニシヘ／ムカシの断絶感・漠然性／連続感・明確性がわかる指摘として援用したが、「いにしへにありきあらずは知らねども」と詠む五例目も、望月が引く「知ラヌ」イニシヘ使用例と同一視できる（望月は「類例」としている）。とすると、五例目から読みとるべきは、明確性ではなく、漠然性となる。六・七例目は、Ⅱ節（および前々節）でとりあげた『古今』仮名序の「古の世々の帝」「古よりかく伝はる」。これらは、『古今』の真名序「昔、平城天子」や仮名序「男山の昔」ひいては八八九番歌「昔は男山」と好対照をなし、断絶感・漠然性／連続感・明確性という対照性が認められた。両例は、明確性の例たり得ない。内田のムカシ使用例のとらえ方につづき、内田のイニシヘ使用例のとらえ方にも従うことはできない。みな明確性を示してはおらず、その逆の、イニシヘ断絶説に帰結する漠然性を示しているのである。

以上、本論に前置される国語学部分の例示を具体的かつ網羅的に見てきたが、内田論文の眼目たる「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ」という『古今』八八七番歌にも触れておく。この歌は、一般的には「知」られていない漠然性の方に注目すべきと思われ「けれど」で切り換わる前の、一般論を詠んだ上句内に「いにしへ」がある点を重視せねばな

るまい)、明確性とは逆の、イニシへ断絶説に帰結する漠然性を示していよう。私見とはことごとく逆なのが内田説であり、当然、従い得ない。イニシへ断絶／ムカシ連続説適用が妥当というこれまで説いてきた私見が揺らがないことを述べて、内田説に対する批判を終えたい。

一方、まだ「調査対象」限定の問題しか批判していない、イニシへ連続／ムカシ断絶説と言い得る吉野説に対しては、批判すべき点が多々残っている。吉野のイニシへ／ムカシ使用例のとらえ方を、以下、やはり具体的かつ網羅的に批判し、正反対のイニシへ断絶／ムカシ連続説こそ「古今」に適用すべきことを説いていく。

まず、歌以外から見ると、Ⅱ節で述べたとおり、真名序でも仮名序でもイニシへ断絶説／ムカシ連続説の優位とイニシへ連続／ムカシ断絶説の劣位が言える。詞書・左注に関しては、拙稿①で述べた『万葉』の題詞・左注に関する指摘を参照されたい。注17で引用したように、『万葉』の歌ならぬ題詞左注、『風土記』中の『豊後』『肥前』『播磨』『靈異記』、といった記録的性格の強い類のものに注目すると、実に顕著なムカシ偏重が認められる(「歌に比べ詞書あるいは題詞・左注を記録的性格の強い類のものと見る点に、異論はあるまい」。なお、右の指摘は、

『万葉』では、題詞冒頭の時代提示に「古」を用いることはなく、用いるなら必ず「昔」を用い(三七八六・三七八

八・三七九一・三八〇三・三八〇四番歌)、左注における「右、伝へて云はく」につづく時代提示も同じである(三八〇八・三八一〇番歌)

とつづく。冒頭付近の時代提示に注目した私見なのであった。『古今』では、二一九・七三六・八三七・八五三・八五七番歌詞書と四〇六・八九五・九七三・九九四番歌左注にムカシ使用例があり、イニシへ使用例を有する詞書・左注はなくて、冒頭付近に時代提示があると考えられるのは、

この歌は、「昔——中略——よめる」となむ語り伝ふる

この歌は、ある人、「昔——中略——つかはせりける」となむ言へる

ある人、この歌は、「昔——中略——なりけり」となむ言ひ伝へたる

という四〇六・九七三・九九四番歌左注である。みな『万葉』三八〇八・三八一〇番歌左注同様のムカシ使用例と見なせるし、『万葉』三七八六・三七八八・三七九一・三八〇三・三八〇四番歌題詞や『豊後』『肥前』『播磨』や『靈異記』も含めて明らかにムカシ偏重を認め得るなら、拙稿①以来述べてきた、ムカシの明確性あるいは記録に適す特質が中古の右三例にも継承されている、と言わねばなるまい。また、詞書中の全五例＋八九五番歌左注中の一例に関しては、前節で見た『土佐』の「昔へ人」「昔の人」「昔の子」四例を思い出してほしい。そこでは、一見変わらぬ心中にある故人に対するムカシ使用と見なせそうな例で

あつても、日記筆者の全体的統一意識によるものとして、変わらず心中にある故人に対するムカシ使用と見なさなかつた。実は、八三七・八五三・八五七番歌詞書中の三例も故人に対する哀傷歌の詞書にあるのであるが〔注21〕、日記筆者の全体的統一意識によるムカシ使用ととつた「土佐」の「昔へ人」「昔の人」「昔の子」四例同様、これらも、歌集編者の全体的統一意識によるムカシ使用ととつておく。それは、『古今』詞書左注（および『後撰』詞書・作者名〔注22〕）にもムカシ偏重が認められるからであり（イニシへ使用例なし）、このことを念頭に置けば、歌集編者に記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシで全体を統一しようとする意識があつた、ということにならう（それを『八代集』全体にまで広げ得る可能性もある〔注23〕）。残る二十一例のうち、

昔あひ知りて侍りける人の、秋の野にあひて、物語しける
ついでによめる。

右大臣住まずなりにければ、かの昔おこせたりける文ども
をとり集めて返すとて、よみておくりける

という二一九・七三六番歌詞書中の二例に関しても、やはり、記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシで全体を統一しようとする歌集編者の意識を考えたい。最後の、

この三つの歌は、昔ありける三人の翁のよめるとなむ
という八九五番歌左注中の一例に関しても同様で、とにかく、ムカシ連続説に帰結する明確性で説明可能な例ばかりなのであ

る。

つづいて、歌。ただし、既出の例は除くので、その除く例を予め記しておく。イニシへ使用例では、注11で七三四番歌、注13で八八八番歌、本節で三五三・八八七番歌、ムカシ使用例では、Ⅱ節・前々節・本節で八八九番歌、前々節で一〇〇三番歌、本節で一三九・六三六番歌が既出であり、これらに関しては、イニシへ連続説／ムカシ断絶説とは正反対のイニシへ断絶説／ムカシ連続説で説明すべきと考えられたのであつた。なお、吉野は、『竹取』における前世に当たるムカシ使用例＝「昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける」もあげ（前節既出）、

「この世」に対する、「むかしの世」という意識が濃いと述べる（傍点田口）。しかし、話者「かぐや姫」として連続感ある過去になるゆえのムカシ使用と見たとおり、ここはムカシの連続感で説明すべきであらう。そして、そうであるなら、来む世にもはやりなむ目の前につれなき人を昔と思はむ

という『古今』五二〇番歌の「昔」も（『新編全集』は「昔」を「前世での人」と訳す）、ムカシ連続説でとらえねばなるまい。吉野は、ムカシについて「現在との間に断絶の感じられる過去を指して言」つているととるが、領けない。この五二〇番歌も、除く例に含め、以下、残る例に関し論を進めていくことにする。また、イニシへ使用の歌に関しては全例既出になつていて〔注

24」残るは右以外のムカシ使用の歌だけであることも、予め断っておく。

では、ムカシ使用の歌に關し、四種に分けて説明していこう。

一種目は、既出の一三九・六三六・八八九番歌と同じく経験内の過去に対するムカシ使用の歌で、ムカシの連続感も感じられる（ムカシ連続説に帰結するのは、言うまでもない）。該当するのは一六三・六三〇・八六九・九四〇番歌および九〇九番歌であり、説明すると、一六三番歌は、『新編全集』が、

今は女主人のいなくなった若いころの思い出の家を訪ねた時に、ほととぎすに託して作者の心を詠んだ

と考えるとおりで、そうした経験内の過去「昔へ」を、

昔へや今も恋しき郭公故里にしも鳴きて来つらむ

と詠んでいるようし、「今も恋しき」からわかる「恋し」さの連続感も要注目である。また、『新編全集』が、第二句以降を、

私はあらぬ評判を立てられると残念だから、あなたのことを昔も今も知らない、とはつきり言っておきましょう。

と訳す六三〇番歌や「注25」、第三句以降を、

この絹は実は昔から、深紫のように深い、私のあなたに対する心で染められているのですよ。

と訳す八六九番歌や、下句を、

遠い昔を恋い慕って流す私の涙であったよ。

と訳す九四〇番歌にある各「昔」は、みな「私」の思い出し経験内の過去を詠み込んでいて、これらには、「昔も今も」変わる

らぬ方針・「昔から」同じままの「あなたに対する心」・「遠い昔を」忘れられず「恋い慕」う気持ちといった連続感もある。そして、

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

という九〇九番歌に關して言えば、『新編全集』が、

私は誰を心を知り合った親友としたらいいのだろうか。高砂の松は私に負けない老齡ではあるが、松では昔馴染の友人にはならないのだから。

と訳すとおり、「知る人」＝「昔の友」は「心を知り合った親友」

＝「昔馴染の友人」をさす。仮想して詠んだ「知る人」＝「昔

の友」ゆえ、実際に経験をともにした相手ではないが、その仮想される相手が「親友」＝「昔馴染」であれば、思い出のなかにありつづけるはずの忘れ得ぬ相手を仮想していよう（拙稿①

で論じた『万葉』三〇九番歌に似たところがあるので、参照されたい）。九〇九番歌も、これまでの歌と同様のムカシ使用とされる。

ちなみに、吉野が「イニシへは現在との連続性において捉えられた過去であり、ムカシは現在と断絶している過去である」とまとめていることはI節で紹介したが、実は、次のようにつけてもいる。

「ムカシは現在と断絶している過去である」といった場合、断絶しているのは時間ではない。かつての自分をとりまく状況が現在のそれと断絶しているのである。そのきっかけ

になったのは主に人事の変化であるが、その変化を断絶と意識しているのは話者である。

吉野は、イニシへに關しては、

過去から現在へ、また現在から過去へと連続して流れる時間を感じられているだけであり、現在と過去を断絶させる意識はない。

と、時間的な断絶／連続感の問題としてとらえるのに対し、ムカシに關しては、それと異なるとらえ方をしているようで、右のとおり、「断絶しているのは時間ではない。かつての自分ととりまく状況が現在のそれと断絶している」とする〔注26〕。しかし、「かつての自分ととりまく状況が現在のそれと断絶している」なら、たとえば隔世の感のような時間的断絶感を感じるのが普通であろうし、そういう変化した「状況」では、たとえばⅡ節・前々節でとりあげた『伊勢』六二「段取録歌のように、ムカシ使用ならぬイニシへ使用になるのが普通と思われる（逆に、そこまで変化していない「状況」では、やはりⅡ節で六二「段取録歌と比較した六〇「段取録歌のように、イニシへ使用ならぬムカシ使用になるのが普通であろう）。とにかく、右の吉野説にも従えないのである。前述の一六三・八六九・九四〇番歌に關しても言えば、確かに、「今は女主人」が「いなくなつたり、〔あなた〕が昇進したり、かつてのことが「遠い昔」とされたりして、「かつての自分ととりまく状況」に変化があるとは言え、各詠者がそれら経験内の過去を「昔」と詠む三首で重要なのは、

「状況」の変化より、そうした変化と無關係に連続している「恋し」・「心」・「気持ち」のはずで、そんな連続感の方にこそ注目すべきではないか。また、何に對するムカシ使用かも、熟考したい（後述）。

そして、右の、変化と無關係な連続感ゆえのムカシ使用でこそ説明できるのが、二種目なのである（当然、ムカシ連続説に帰結）。一言で言えば、自然の不変・連続感を言うのに適すムカシ使用、となるが、吉野は、自然ならぬ人事に對するムカシ使用と見て、断絶感を讀んでいよう。次の四二・五七・一四四・七四七・八五一「番歌に關しても、吉野は「現在との間に何らかの点において断絶感がある」例に含めるけれど、頷くことはできない。

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける
色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける
いそのかみふるき都の時鳥声ばかりこそ昔なりけれ
月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはものと身に
して

色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき
四二番歌は、「知らず」と詠む「人」事と對比して「花」自然が「昔」ながら「の香にほ」っていることを詠むのであって、その自然は、変化して断絶しているのではなく、不変なまま連続（循環）している。ここで思い出してほしいのが、一般的には「知」られていない漠然性の方に注目すべきと前述した、

漠然性のイニシへ使用ととれる八八七番歌である。そこでは、『けれど』で切り換わる前の、一般論を詠んだ上句内に『いにしへ』がある点を重視」したように、どこまでの範囲で使用されているかを考えねばならなかった。五七番歌も、不変なまま連続（循環）する自然を推測する上句内に「昔」があり（四二番歌は自然を詠む下句内）、かつ、「ど」で切り換わって、下句で変化した人事を詠んでおり、そこから、自然の不変・連続感／人事の変化・断絶感といった対比〔注27〕、および、前者を言うのに適すムカシ使用が、見えてくる。一四四番歌で言えば、「いそのかみふるき都」が変化して断絶した人事、「時鳥声ばかりこそ昔なりけれ」が不変なまま連続（循環）する自然に当たり、同様な対比があつて、後者に対して「昔」が用いられる。拙稿①で見た『伊勢』四段収録歌と同じ七四七番歌に関しては、同稿で、『歌ことば』の「昔」の項にある、

去年までの恋人とともにした春が「むかし」なのである。

という指摘を引いたが、経験内の過去に対するムカシ使用でもあつて一種目と重なり、かつ、自然の不変・連続感を言うのに適すムカシ使用でもあるのが、七四七番歌であろう（四二・五七・八五一番歌も同様と思われる〔注28〕）。七四七番歌詞書でも、『伊勢』四段地の文でも、「春」の到来を示す「梅」はちゃんと咲いているし、「月」もしっかり眺めているから、経験内の過去である「去年」＝ムカシの自然は不変なまま連続（循環）している。従つて、上句は、注27で述べた自然の不変・連続感

／人事の変化・断絶感を対比する伝統も考え併せるなら、反語ととつて、「月」も「春」も「昔」のまま連続（循環）して自然は不変、と読める。そして、「わが身ひとつ」も「もとの身」で変わらないのに、状況が恋人と逢えないものへと変化している。すなわち、人事が変化してしまっているのである。

つまり、「梅」がちゃんと咲いて「月」をしっかりと眺めるといった詞書あるいは地の文の情報は、歌で詠まれる自然の不変・連続感を補足しており、それと対比するかたちで人事の変化・断絶感も詠まれるのであつて、これまでと同じ対比やムカシ使用が認められるわけである。認め得るのは八五一番歌もそうであり、とりわけ五七番歌とは上句↓下句の流れも同型と言える。「色も香も昔の濃さに匂」うのは、詞書によれば「あるじ身まかりける人の家の梅の花」であり、「梅の花」＝自然は不変なまま連続（循環）していても、人事には変化があつて、「あるじ」＝「植ゑけむ人」は亡くなり、詠者はその「影」を「恋し」がつている。不変なまま連続（循環）する自然を詠む上句内に「昔」があり、かつ、「ども」で切り換わつて変化した人事を下句で詠んでいるから、五七番歌と同型なのである。

自然の不変・連続感を言うのに適すムカシ使用ととれる二種目の次は、そういう自然をモデルにしたと思われる三種目に進む。自然ならぬ人事を対象にムカシを使用して、該当するのは、

花のごと世の常ならば過ぐしてし昔はまたもかへりきなま

し

という九八番歌。第二句までは「花」＝自然「のごとく」「世」＝人事が「常」＝不変なまま連続（循環）する「ならば」と詠んでおり、不変・連続感の自然をモデルにした上で不変・連続感の人事を仮想し、第三句以降で、結局は、自然の不変・連続感／人事の変化・断絶感を対比する伝統に則り「注29」、かつて経験した「昔」が再び「かへ」ってきたであろうに「かへ」ってほこない」と詠む。これは、変化と無関係な連続感ゆえのムカシ使用でこそ説明し得る、自然が対象の二種目から派生したものである（よって、ムカシ連続説に帰結する点も同じ）。

四種目は、

世の中は昔よりやは憂かりけむわが身ひとつのためになれるか

という九四八番歌（『新編全集』の訳は「この世は昔からつらい世の中だったのだろうか。それとも、わが身ひとつにとつただけこんなにつらいものになったのだろうか」。上句では、不変なまま連続して「憂」いことを、自然の真理ならぬ普遍的人事の真理として仮想し、その当否を考える。そして、下句では、普遍的ならぬ個人的な「わが身ひとつの」人事だけが「憂」い可能性も思う。もし仮に第二句が「いにしへよりや」であったとしたら、拙稿①で詳述した経験外の（ずうっと的網羅性）を強調する（イマに連なるイニシヘ）に当たり、それならそれで伝統性が前面に出て合うのであるが、「昔よりやは」とある右

の場合は、明確性のムカシ使用ととれば（これはムカシ連続説に帰結）、今度は普遍的真理という点で合う。上句で明確な普遍的真理かを問う、というわけである（明確でない普遍的真理などあるまい）。

以上、歌以外・既出の歌・既出以外の歌を具体的にとりあげ、『古今』におけるイニシヘ／ムカシ使用例を網羅した。内田説同様、吉野説にもことごとく従うことはできず、やはり、イニシヘ断続／ムカシ連続説適用の妥当性が言えて、私見は揺らがないままであった。今後、『古今』におけるイニシヘ／ムカシの使い分けを論じるなら、私見に触れることなく論文を書くのは控えてもらいたい（もちろん、中古のなかでも比較的早い成立のものまでで論じるのであれば、何をとりあげるにせよ、先行研究としての私見を避けず、がつぶり四つに組んでほしい）。『古今』につづき、その次の勅撰集『後撰』に目を移そう。中古のなかでも比較的早い成立ということなら、とりあえず、『後撰』あたりまで含められる可能性は、十分考え得る。

まず、歌以外から見ると、前述のとおり、イニシヘ使用例がなくてムカシ使用例ばかりのムカシ偏重が認められ（六一・一〇九七・一一七二・一一七四・一一七五・一二二・一二二八・一二九一・一二三五番歌詞書および四二六番歌作者名「むかしの承香殿のあこき」）、歌集編者に記録に適す特質＝明確性ゆえのムカシで全体を統一しようとする意識があつたものと思われる。ムカシ連続説に帰結する明確性で説明し得る点は、『古今』

と変わらない。

次に、イニシへ使用の歌を見ると、

女郎花折りも折らずもいにしへをさらにかくべき物ならなくに

いにしへの野中の清水見るからにさしぐむ物は涙なりけり
いにしへの心はなくや成にけんたのめしことの絶えて年ふる

いにしへも今も心のなければぞ憂きをも知らで年をのみふる

いにしへも契てけりなうちはぶき飛び立ぬべし天の羽衣

という三五・八二三・一〇〇三——一〇〇四・一一一二番歌があげられるが、これらのうち、八二三番歌は第二句まで同じ前述の『古今』八八七番歌によつたためのイニシへ使用に過ぎないし、一〇〇四番歌は一〇〇三番の贈歌にある「いにしへ」を受けてのイニシへ使用に過ぎないので、とりあげない。三五・一〇〇三番歌に関し『新大系』の訳を引きつつ説明すれば、前者は第三句以降「昔のことを今さら心にかけて」というようなものではないのですからね」と断ち切っている点、後者は第五句「絶えたままで年月がたつてしまったことでありますよ」とある点で、断絶感が感じられる。ここまでは、『古今』歌におけるイニシへ使用例同様、イニシへ断絶説で問題なく説明できよう。気になるのは一一一二番歌で、これは、

庶明朝臣中納言になり侍ける時、うへの衣つかはすと

て

右大臣

思きや君が衣をぬぎかへて濃き紫の色を着むとは
という一一一番の贈歌に答えており、状況的には、第三句以降の訳のみ示した前述の『古今』八六九番歌に似ている。そちらも、やはり中納言に昇進した藤原国経に源能有が、

色なしと人や見るらむ昔より深き心に染めてしものを

と詠む歌であり、経験内の過去に對する、連続感もあるムカシ使用例と言えた。とすると、これに似た状況を一一一一——一一二番歌も詠んでいるのに、連続感のムカシ使用ならぬ断絶感のイニシへ使用になっているのは、引つ掛かる。また、「な」を用いた念押しからは明確性も感じられ、それならムカシ使用になつてよさそうなのに、漠然性と結び付くはずのイニシへ使用になつていて、それも引つ掛かる。しかし、ここも、『新大系』が、

思いもしませんでしたよ。

と訳す贈歌第一句「思きや」に注目すれば、断絶感のイニシへ使用で説明可能となる。同書は、答歌第二句までを、

御存じなかつたようにおっしゃるが、あなたとは、古い昔から深い契りがあつたのですね。

と訳す。すなわち、実は「深い契りがあつた」ものの（そこを念押し）、「御存じなかつたようにおっしゃる」ので、その連続感なき「御存じなかつたようにおっしゃる」気持ち念頭に置いて、断絶感ある「いにしへ」で表現したものと思われる。イ

ニシへ使用例に関しても、『古今』歌におけるイニシへ使用例と同じく、イニシへ断絶説に帰結する。

一方、ムカシ使用の歌には、八一・一〇二・一六〇・二八八・六三三―六三四（本節既出『古今』六三〇番歌と同じ）・七二〇・九一一・一〇〇五・一〇九七・一一〇六・一一三五・一一四〇・一一九二・一二五三・一二八七・一三〇一・一三九六・一三九九・一四〇七番歌があり、『古今』歌におけるムカシ使用例に関し行なった分類で言うところ、経験内の過去に対するムカシ使用ととれる一種目もあるし、変化と無関係な連続感ゆえのムカシ使用でこそ説明できる、自然の不変・連続感を言うのに適すムカシ使用の二種目もある。一種目としては、下句で「昔忍の草をこそ見れ」と詠む二八八番歌・下句で「昔のつまと人に語らむ」と詠む六三三―既出の六三四番歌・第二句までで「昔せし我がかね事の」と詠む七二〇番歌・下句で「昔ながらの我が身とも哉」と詠む九一一番歌・第二句で「昔だに見し」と詠む一〇〇五番歌・下句で「昔おほゆる円居したれば」と詠む一〇九七番歌・下句で「声は昔のうちからぬ哉」と詠む一一〇六番歌・第三句以降で「世中をなどか昔と言ひて過ぐらん」と詠む一一九二番歌・下句で「我は昔の我ならなくに」と詠む一二五三番歌・下句で「昔の秋を思やりつ、」と詠む一二八七番歌・上句で「寝ぬ夢に昔の壁を見つるより」と詠む一三九九番歌・下句で「昔の春を思やりつ、」と詠む一四〇七番歌が該当し〔注30〕、二種目としては、上句で「鶯の鳴くな

る声は昔にて」と詠む八一番歌・第二句までで「花の色は昔ながらに」と詠む一〇二番歌・第二句以降で「昔のやどの杜若色許こそかたみなりけれ」と詠む一六〇番歌・上句で「めづらしや昔ながらの山の井は」と詠む一一三五番歌・第三句以降で「もみぢ葉の色は昔に変らざりけり」と詠む一三〇一番歌・下句で「春の始は昔ながらに」と詠む一三九六番歌が該当する〔注31〕。残るは、

昔より鞍馬の山といひけるは我がごと人も夜や越えけんという一四〇番歌だけとなるが、『古今』歌におけるムカシ使用例に関する分類で言えば、明確性のムカシ使用ととれる四種目となる。「昔より鞍馬の山といひてきたこと」そういう地名とされてきたことは明確な事実であり、それゆえのムカシ使用と考えられる〔注32〕。ムカシ使用例に関しても、『古今』歌におけるムカシ使用例同様、ムカシ連続説への帰結が言える。『古今』につづいて具体的かつ網羅的に見た『後撰』でも、イニシへ断絶／ムカシ連続説を適用することが妥当と言えた。本節のみならず、拙稿①以来、私見は揺らがないままなのであった。

注21 各詞書には、

昔あひ知りて侍りける人
昔を思ひやりてよみける
昔の手にてこの歌をなむ書きつきたりける
とあり、これら「昔」はみな故人生前の時代をさす（特に一・三例目は、死後間もない）。

『後撰』左注がないのは、該当例がないからである。

吉野は、

八代集の詞書・左注にはムカシが多く用いられるが、イニシヘが用いられることは極めて少ないと述べ、次のような理由づけもしてはいる。

和歌ではムカシが用いられることが多いのは、——中略——過去との断絶を詠嘆することが多いことによる

とした上で（このムカシ断絶説に対しては後で批判する）、

詞書・左注にムカシが多く現れるのは、主となる和歌と同様の立場で過去が捉えられていることを示唆する

と考えるのであるが、『古今』『後撰』詞書・左注におけるムカシ偏重は、ムカシの明確性あるいは記録に適す特質の中古への継承として説明すべきであって、もち出すならムカシ断絶説ならぬムカシ連続説の方と思われる。

一〇〇三番歌の本文に関し、『新編全集』は『忠琴集』によって「いにしへにくすりけかせる」を補うが、吉野はその本文によつていないし、たとえば『新編国歌大観』や『新大系』の本文もそうなっていない。従つて、そのイニシヘ使用例のみは除く（実は、「いにしへにくすりけかせる」を補う方が、断絶感・漠然性のイニシヘ使用を説く私見にとつてはありがたいのであるが、これなしでもイニシヘ断絶説の優位は十分言える）。

望月説の「知ラス」イニシヘについて前述したが、人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとを言はむと詠むこの歌は、経験内の過去に対するムカシ使用と見ていい。

吉野は、

イニシヘは「経験の時間」における過去を表す語であり、ムカシは「思索の時間」における過去を表す語である

と考えるようであるが、たとえは定説化している経験外／経験内の過去に対するイニシヘ／ムカシ多用はどう説明したらいいのであろうか。また、「思索の時間」は、「一定の速度で流れる」とする「経験の時間」に対して、「流れは不定である」ようで、

恋人との時間は早く流れ、退屈な時間はゆっくり流れたり、ある

いは、まったく停止したりし、遠い昔のことが昨日のことのように思われたり、目の前に起きていることを過去に起きたことのように感じるなど、過去・現在・未来の秩序を無視するといった特徴をもつ。

と説明される。主観に左右されるものと見ているようである。しかし、前々節「個々の気持ちや表現したいことに応じて変わる可変的基準とその可変性のなかに存する法則性」において、「主観的相違が、ムカシ／イニシヘ使用いづれかに定まらない可変性を招来している」と述べたのを、思い出してほしい。主観性なら、ムカシ使用例にもイニシヘ使用例にも認められるから、吉野のこちらの考えにも従い得ない。抽稿①でとりあげた『万葉』三十一番の近江荒都歌第二反歌に関しても、

上句で自然の不変、下句で人事の変化を対比するところは、——中略——三〇番の第一反歌から継承されている。

と述べた。自然の不変・連続感／人事の変化・断絶感は、伝統的な対比と言えよう。

一四四番の素性歌に関しては、「ふる」くは「都」であった時代が経験外になるので『新編全集』は『八代集抄』は『都』といつても伝説のようなもの」と評す、含めないでおく。

たとえば『古今』で直前にある九七番歌を見ても、

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

となつており（『新編全集』は『八代集抄』は『八代集抄』に「人間不定をおもひてよめり」といっている）と評す、注27の近江荒都歌第一・二反歌と同じ対比の伝統に則っていることがわかる。

これらのうち、九一一番歌は不変なままの「我が身」でありつづけたいと願ひ、一一〇六番歌は「うとからぬ」ままの「声」の不変を思っているから、自然ならぬ人事に対してはあったも、不変・連続感を言うのに適すムカシ使用と言えて、そこは二種目と重なる。また、筆跡を「見」て故人を思う一三九九番歌と故人生前の昨「春を思」う一四〇七番歌に関しては、注19において『万葉』歌では故人生前の時代あるいは故人自身にはイニシヘ使用が普通であるが、『万葉』歌中にも注18にあげた四四八三番歌のような例はあつて、心理的に近く

連続的な故人にはムカシ使用になる」と述べたごとく、心理的に近く連続的であれば、イニシへ使用ならぬムカシ使用になっていい。一三九・一四〇七番歌のムカシ使用も、『万葉』四四八三番歌と同様に考えたい。

31 『古今』歌におけるムカシ使用例の二種目にも、経験内の過去に対するムカシ使用でもあつて一種目と重なり、かつ、自然の不変・連続感を言うのに適すムカシ使用でもあるものがあつたが、『後撰』歌のムカシ使用例の二種目はみなそれに該当する。

32 明確性ならぬ漠然性と結び付くケムが用いられてはいても、それは、「昔より鞍馬の山とい」つてきた事実の明確性は揺らがず、前述したイニシヘケムの親和性にとって支障とはならない。

VI 結び

イニシヘ／ムカシ使い分けの曖昧化が確定してくるのは、I節で予告したとおり、『落窪』『源氏』あたりであろう。

たとえば、望月が「平安時代のムカシとイニシヘ」中の「源氏物語のムカシとイニシヘの紛らわしい例について」であげる次の「昔より」「いにしへより」など（『新編全集』では三卷一五六―一五七頁）、その例と言えそうである。そこでは、主人公が、相手との縁について、

昔より心憂かりける御契りかな。

と言ひ、地の文には、相手のさまが、

いにしへよりも、もの深く恥づかしさまさりて

とある。同じ時間の流れを「昔より」とも「いにしへより」とも表現するのは、前者でも後者でもいいからと思われ、曖昧化

を示していると考えられる。注5にあげた白井論文でも、ここは例示され、「ほぼ同じ時点のことをイニシヘともムカシとも述べて」いる、とされる。ちなみに、「いにしへより」の三行後には、主人公が相手と「おほかたの昔今の物語をしたま」うとあり、同じ地の文において同じ過去が「いにしへ」でも「昔」でもいいことがわかる。

『落窪』も見よう。

いにしへにたがはぬ君が宿見れば恋しきこともかはらざりけり

とある歌の「いにしへにたがはぬ」は、『新編全集』二六六頁にあり、「昔と変らない」と訳される。本来なら不変・連続感を言うのに適すムカシを使用すべきなのに（前節参照）、イニシヘを使用している（詠者は、四行前で、同じ過去を「むかし」と言ったにもかかわらず）。また、同書七五頁の手紙には、

今宵は「昔はものを」となむ。

さらにこそそのいにしへも過ぎにしを一夜経にけることぞかなしき

とある（「昔はものを」は『拾遺集』では七一〇番の藤原敦忠歌第四句、敦忠は906―943）。「昔」も「いにしへ」もともに経験内の過去に当たり、前者は後者に詠み換えられている。曖昧化が確定してくる時代の到来を感じる。

右のとおり、上代↓中古におけるイニシヘ／ムカシ使い分けの継承は、『落窪』『源氏』あたりでなくなってくる、すなわち、

曖昧化が確定してくるように思う。継承は、中古のなかでも比較的早いうちに限られると見ていい。

とは言え、前節までで見てきたとおり、曖昧化する前の「上代の例の名残と思われる、上代に比較的近い頃の中古の例」に関しては、使い分けに留意すべきであるし（上代の例に関し留意するのは言わずもがな）、象徴的な例で言うところ、日本一大きな古語辞書『角川古語』と日本一大きな国語辞書『日本国語』で、正反對のイニシヘ断絶／ムカシ連続説とイニシヘ連続／ムカシ断絶説が並存する、などといった信じ難い混乱は、対外的な意味でも、収束に導かねばならない。本書がイニシヘ断絶／ムカシ連続説に決着させる一助となれば、誠に幸いである。

なお、最後に、付言しておく。私が健全な議論がはじまることを望んで上代文学を対象とする全国的学会に発表を申し込み、断られても、範囲を『伊勢』にまで広げて平26・12の名古屋平安文学研究会で発表したり、範囲を『古今』『後撰』『伊勢』『竹取』『土佐』にまでさらに広げて平30・10の中古文学会で発表したりして、周知につとめ、少しでも混乱を收拾しようとしたことは、拙稿③や注6にあげた国語教育に関する拙稿の注のところで述べた【注33】。その一昨年の発表原稿をそのまま近刊予定の拙著『上代イニシヘ／ムカシ考 中古への流れにも論及して（仮題）』の最終章にすべく文章化してきたのであるが、草稿が完成に近づくにつれ、あることが気になりはじめた。周知につとめようと地方的研究会や全国的学会で発表してきたの

に、拙稿④までとちがって本稿のみリポジトリで閲覧できないのは、おかしいのではないかと。そこで、これまで同様、学内の雑誌に載せようと草稿を補訂し、リポジトリで閲覧可能とした次第である。もちろん、リポジトリで閲覧し得る拙稿①～④および本稿Ⅱ初出論文は拙著収録論文のプロトタイプゆえ、極力後者の方で読んでもらいたい。

注33 四年前に出した拙稿③には、「昨年の発表のことは記せていない。

（たぐち・ひさゆき 本学教授）